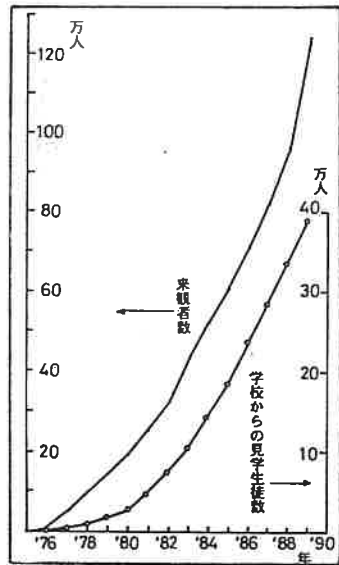


福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース

(財) 第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区夢の島3-2
都立・第五福竜丸展示館内
電話 (521) 8494



第1表 創立以来、年々の来館者数及び学校からの見学者数のグラフ

●都道府県別学校見学回数

都道府県	見学回数	都道府県	見学回数
北海道	3	新潟県	11
青森県	1	静岡県	15
岩手県	3	愛知県	14
宮城県	24	岐阜県	6
秋田県	44	東京都	11
山形県	2	神奈川県	17
福島県	1	埼玉県	2
茨城県	2	千葉県	167
栃木県	97	東京都	3
群馬県	163	東京都	121
埼玉県	51		
千葉県	3		
東京都	2752		
東京都	5		

第2表 いままでの各都道府県別の見学学校回数

新年を迎えるにあたって

三宅 泰雄

新年おめでとう。今年の皆様方の健康と、ご好運を祈っています。本展示館も昨年二月で、創立以来の来館者百万人を迎えました。しかも、昨年あたりから、来館者数が急激に増えてきました(第1表)。その主な原因の一つは「夢の島公園」が整備されたこと、交通の便がよくなったこと、隣接した地域に熱帯植物館ができたことなどと思われまます。

そればかりではなく、最近、生徒が先生に引率されて、見学に来る数が増えて来はじめたことも、来館者増の因子の一つとなっています(第1表)。それに東京都と付近の都市の学校からだけではなく、北海道あたりまでの学

校からも来るようになりました(第2表)。見学の目的は、平和教育ですが、事前に生徒たちに「第五福竜丸事件」について、自習させている学校もあります。元来なら、戦後半世紀近くを経て、国民の大多数の戦争への関心がうすれ、学校の先生たちでさえ、戦争を知らない人が多い時代です。それなのに、なぜ見学に来る学校が増えたのでしょうか。正直に言えば、私自身、「第五福竜丸」は、時とともに世間から忘れ去られ、来館者も次第に減るのではないかと考えていたのです。

そのために、今年、積極的に賛助会員の募集をはかりたいと考えています。何卒、お知り合いの方にも、ご参加頂けるよう、お勧めいただきたくお願いいたします。今年もひきつづき、本協会と展示館のために、ご助力頂けるようお願いし、新年のご挨拶といたします。(第五福竜丸平和協会会長)

船に聞かせたうたごえ
「わたしたちは忘れない、ヒロシマを」。さわやかなうたごえが船の周りにこだましました。十二月十七日、来館した品川区上神明小学校六年生のみなさんと、見学のと、代表が「みんなの願い」

を朗読、先生の伴奏にあわせ、全員で力いっぱいうたい、「第五福竜丸に聞いてもらい」ました。また、十日には、山梨大学生協の青年二十三人が来館。十二月八日に学内で福竜丸の模型、パネルを展示し、平和集会を持ったあと

いのちの重みを伝えたい

古屋 里絵

第五福竜丸の見学を終え、帰りのバスの中で、今日目にしたものを思い返しているうちふと、ある言葉が頭の中に浮かびました。「——生きていくということ……人は愛するということ、あなたの手のぬくみ、いのちということ」これは、谷川俊太郎の「生きる」という詩の、おしまいの一節です。

私は、現在、教師を目指して教育学部の三年生に在籍しています。「生きる」という詩は、先日、国語科教育学の講義の中で取り上げられたものでした。今日、私は、第五福竜丸を見て、人間の愚かさ、自分に対して、一人の人間としての責任

の重さを実感しました。(人間は、唯一、愛する、という能力を持っていくにもかかわらず、平気で人の命を奪うものをつくってしまったんだ。なんて愚かなことなんだろう。)とても暗い気持ちで、そう思った時、「生きる」の詩の一節が頭をよぎったのです。(もし、私が将来教師になって、この詩を子どもに読んで聞かせる時、果たして、人間として生きるということの意味、そして命の重みを本当に伝えることができるのだろうか。将来を担っていく子どもたちに、何の陰りもなく、命の貴さ、生きることに意味を伝えたい。)そう強く感じました。

の見学会でした。年末の二十七日には、八九年最後の団体見学として、歴教協関東ブロックの先生たち六十余名が研修。都内の歴史的施設を巡り、ウォーターフロント問題を考える行動のしめくりでした。

江戸川区の江戸川高校二年生のみなさんが、冬休み中、五、六人の班行動で連日展示館で学習。その熱心な姿が印象的でした。十二月の団体見学は約百団体。一月以来の一年間の来館者数は二十六万九千七百人と、昨年の約二倍となりました。ますます増加する来館者の中で被爆四五周年新しい年の幕あきです。



船を前にしてみんながうたった：(十二月十七日)

●ご参加を！
三・一ビキニ事件記念集会
二月二十八日(水)午後六時半から、文京区民センター三A会議室で講演 池田長生氏(ビキニ死の灰分析余話)、田村清氏(核戦争防止国際医師会議の活動)。参加費三百円。
第五福竜丸平和協会主催。

被爆四五周年の新年に

伊藤 サカエ

ヒロシマに原爆が投下されてから四五年になります。日数で一万六千日以上の永い年月をヒバク者は毎日、毎日、人間として生きることも、人間らしく死ぬことも許されず深い心の傷と体の不安におびえながらや々と生きて来ました。原爆のため骨すら残さずこの世から一瞬に消された人。黒焦げになり炭になって死んだ人。体の皮がツルツルに剥げ下り、お母ちゃんとお虫の息で呼んでも助けてやれなかった全滅のヒロシマ……

加害者のアメリカはこの地獄の様子や原爆の事を口から出してはならぬ、と緘口令を出しました。この十年間に親類や知人を探すために被爆直後市内に入った何千人という無傷の人達は第二次放射能のため死亡しました。無傷なのに白血病になり、耳から、鼻から、口から、血を吹き出して死んだ人は胃潰瘍と医師は簡単に診断し、血便の人達は集団疫痢として扱わ

れ身内にも面会出来ないまま死んで逝き、原因不明のフラフラ病になれば心臓病と死亡診断書に記載されました。

八月六日、国家総動員法により広島から十回離れた町から百名位で入市し、被爆した私は被爆後、一緒に行った人達が次々死ぬるのに堪え兼ねて戦争反対、原爆反対を叫んだため、十五名位の警官に土足のまま踏みこまれて家宅捜査を受けました。私の人間としての叫びがそんなに悪かったのでしょうか。これが日本政府です。

昭和二十九年三月一日、ビキニ環礁で第五福竜丸の死の灰事件がおこり、改めて放射能の恐怖が確認されました。八月八日原水爆禁止署名運動全国協議会が結成され三十二万人の署名は遂に自由党も動かしました。日本の平和運動の始まりとなりました。

昭和三十一年八月、日本原水爆被害者団体協議会は結成され、結成

と同時に今日迄政府に対しヒバク者援護法制定を要求して来ました。然しその間、元橋本厚生大臣の私的諮問機関の基本懇(原爆被害者対策基本問題懇談会)は昭和五五年に国が行った戦争犠牲者国民等しく受忍せよ……との答申を出しました。政府はこの受忍論を盾に絶対に核兵器の特異性を認めようとしません。

放射能の恐怖は今や兵器だけでなく、平和利用すら世界の大きな課題となっています。

現在、日本は世界経済の超大国となりながら、かつて国が始めた戦争の核兵器犠牲者に対し線香の一本すら供える予算が無いのではありませんか。政府は戦争の過ちを認めたくないのです。

放射能が人間にもたらす影響がどんなものか世界的に未だ究明されず、癌の根治療法が医学上発見されていない現状の中でヒバク者がどんな心細い不安な日々を送っているかを政府はわかって欲しいと思います。政府は国が戦争を始めて悪かったという援護法よりも、病気になるたら診てやるんだという社会保障でごまかそうとしているのです。

ヒバク者は、三つのほしゅうを要求しています。それは援護法として(一)過去をつぐなう補償(二)現在の健康と生活の保障(三)ふたたび被爆者をつくらないあかしの保証です。

ヒバク者は政党色やイデオロギで訴えているのではなく、被爆の生証人として、いかなる国も、いかなる理由があろうと、核は絶対に否定します。

昨年末の国会参議院で被爆者援護法が本会議で決議されたのは世界に誇り得る功績だと思います。こうした人の命を大切にす平和運動が、草の根となり政治を変え、事が出来るのだ、と心から歓迎、国民みんなで協力して住みよい社会をつくりたいと念願します。

国民のみならず、あなたが、わたしが、政治の流れを変えましょう！

日本原水爆被害者団体協議会代表委員



平和随想 (36)

三宅 泰雄

いま第五福竜丸展示館のある「夢の島公園」が発足したのは、一九七二年の東京都公園審議会の答申以後のことであって、それまで、ここは大規模なゴミ捨て場でした。「夢の島」という魅力的な名前前は、一体、誰がつけたのかについては全く不明です。しかし、このあたりは、昔は広い浅瀬で、ハマグリやアサリが豊富な名所として多くの釣師たちを楽しませていた所だったようです。

その後、昭和年代に入って、これらの浅瀬の埋立てが徐々に進みました。その目的の一つは、ここに新しい飛行場を作りたいという計画があったようです。しかし、この計画も大戦争の勃発とともに、立ち消えになりました。

た。だが、この計画の結果、干潮時には海底が一〜三メートルくらいは、地面に顔を出すくらいになりました。

戦後の一九五六年ごろから、夢の島付近の本格的な埋立て計画が確立され、十四号地の名称の下に、十年位をかけて埋立てを進め、一応、完了しました。

その後、一九七五年になって、「夢の島」として、江東区に編入されることになりましたが、人口はわずかに百人足らずでした。

しかし、それ以前から、この辺りは、台所などからのゴミの捨て場になりはじめ、都も「夢の島」を集約的にゴミ捨て場とすることを決めたのです。付近の住民は、近くをゴミの大量が輸送されることに不潔感を抱き、夢の島のゴミ捨て場に対する反対運動が続きました。

そのころ、当時の美濃部都知事は、都議会で大都会のゴミに対する「戦い」の重要性について言及しました。これが、いわゆる「ゴミ戦争」説です。要は、都民の生活と健康を守るためには、ゴミの処理を計画的に、かつ大規模なものにしなければならぬという趣

旨でした。

とにかく、夢の島あたりは、江戸時代には荒川と隅田川の間にある長さ六キロメートルに及ぶ浅瀬だったようです。その後、この浅瀬を長い時間をかけて、少しずつ埋立てをして、今日の姿になったのです。特に夢の島あたりは、今では近代的な公園地帯と化し、昔の面影や、ゴミ捨て場時代の姿がどうであったのか、想像もつかない景観に変わりました。

それはさておき、一九七〇年ごろから、東京都では問題の「夢の島」を公園予定地にすることを約束し、反対派をなだめ、そこに第五福竜丸展示館、熱帯植物館、温水プール、野球場等をつくる約束をしました。これらの計画案が承認されたのが、前述の一九七二年の公園審議会による決議でした。

こうして、新公園の建設がはじまりましたが、中でも最も早くできたのが、第五福竜丸展示館で、一九七六年六月に開館の運びとなりました。これは、美濃部都知事が特に第五福竜丸の保存に熱心に取り組んでいた成果でした。しかし、その当時は、公園とは名ばかりで、周囲は、まだ泥とゴ

ミだらけでした。折角展示館を見に来られた人々の靴や、ズボンなども汚してしまい、気の毒な有様でした。

前にも書いたことがありますが、ここはゴミの埋立地でありましたから、展示館の建造のため、土地を掘っても、掘ってもゴミのかたまりばかりで、固い地盤に達するまでには、七十メートルも掘り下げねばなりません。とにかく七十メートルまで、深く掘り下げて、そこまで鉄の杭を打ち込んで、強固な土台としました。

最近、サンフランシスコの大地震で、海岸に近い土地や、埋立地で大被害があったことを聞きまして、私はこれらの建物の土台が、固い地盤にまで達していなかったのではなかったか、と想像しています。

この点で、この展示館は、たとえ大地震にあっても、かなりの抵抗力を示すだろうと思っています。なお、この文を書くには樋渡達也氏著「東京の港と海の公園」(東京公園文庫)のお世話になりました。